

信頼と高度な技術をもつて 各国と共に人を育て社会をつくる

五十年で変わった人類と 世界の様子や価値観

令和八年が始まりました。昭和五十一年に創刊された本誌は、刊行から五十年目を迎えました。創刊当時の日本は、戦後生まれの人が人口の半数を超えて、「戦後は遠くなつた」と言われるようになりますが、米国がクシャミをすれば、日本は風邪を引くと言われた時代でもありました。

そのクシャミが日本に波及したかのように、米国航空機メーカー、ロッキード社が日本に最新航空機売り込みを計る際、賄賂を日本政界にばら撒き、時の首

相が逮捕される事態になつて、国内は大騒動となりました。

* 本誌の創刊はその時期です。東の光（東洋の叡知）をもつて、西の風（欧米の低俗文化）の本質を明かし、日本人本来の良さを呼び覚まし、東アジアの同胞と連携し、社会の建て直しを第一義とし、「東光西風」と題する欄を掲げてきました。

振り返れば、米国流の大量消費、個人主義を持って囃した時期がありました。日本人の体質に合わない欧米風の食生活を

為替操作の弊害をまともに受け、「失われた三十年」という時代を甘受することになりました。その事態は、「第一の敗戦」と言われましたが、身辺に焼け野原が拡がったわけでもなく、「敗戦」という意味が分からなかつた人が多かつたのではないかと思います。

給与も国内総生産も上がらないまま、欧米各国から見下された日本が、じつと我慢して耐え、謙虚に、誠実に、よく考え、コツコツと働いてきた三十年であったと言えます。

現在の日本には、世界一と呼ばれるものがあります。平均寿命、パスポートの自由度、百年以上続く企業数、それに東

※東洋の叡知：自然との調和、内的な精神性を重んじる東洋思想を持つ智慧のこと。

京スカイツリーもそうです。その中で、各国の識者がこぞって注目し、話題にするのは、日本人でなければ作ることができない高度で精密な技術です。

日本の産業が停滞すれば、世界の経済がストップする、と言われる昨今です。ハイテク機器に限らず、次世代の航空宇宙産業、最先端の医療現場に至るまで、日本製の部品・素材・装置は欠くことができない物になりました。



空港スタッフ世界一と評判の成田国際空港には、海外から年間4000万人を超える人たちが訪れる。

東と西の国々から日本に来る人たちの羨望と希望

東と西の国から日本にやって来る人たちが大勢います。昨年四月時点で四千万人近くに達しました。日本の名所旧跡を訪れ、感動するわけではありません。街や田舎の道路にゴミが落ちていないこと、時刻通りに電車やバスが来ること、落し物が届けられること、小さな子どもが一人で電車に乗っていること、夜道を女性が一人で歩いていること、などを体験し感激して涙を流す人もいます。どれも、日本では当たり前のことです。そうした感激や感動から分かることは、自國では人間が人間として生き難くなっているということです。

各国の富裕層は、大枚をはたいて日本に来ます。日本は素晴らしい、羨ましいと言いますが、自国で置き去りにされている貧困層の喘ぎ、苦しみは放置されたままでです。

日本では水道水を飲むことは、当たり前のことです。その当たり前は、世界一九六カ国で十二カ国だけです。飲み水が無いため、薬が無いため命を落とす子

どもたちが年間一八〇万人います。そのことを知る人は多くありません。慢性的な水不足、食料不足を経験してきたアフリカ諸国に、これまでの三十年間に有徳の日本人が訪れ、現地住民と共に汗を流し、井戸を掘り、砂漠でトウモロコシを栽培し、農産物の作り方を教え、病気を治す医療施設や子どもたちの教育に必要な場所づくりをしました。

こうした人の動きは、三十年前に日本政府が主導して始めた「アフリカ開発會議」と連携したものではありません。それが今では、アフリカ全十五カ国・地域の首脳が、質の高い技術支援、教育・人材育成について、日本と民間主導の連携を図りたいと言います。

日本人がアフリカ各地で行ったことは、支えて助ける「支援」でも「援助」でもありませんでした。現地の人の名前を覚え、共に汗を流し、共に考え、共に産み出したことでした。

この「共に」という考え方、取り組み方が欧米諸国との社会で拡がれば、差別と格差の大きさは消え、見失った自由、平等、博愛の再生も不可能なことではなくなります。

(河田英治)